

演 題 名	上顎犬歯の埋伏・異所萌出に対し自家歯牙移植を行った2症例
演 者 名	〇〇 〇〇、△△ △△、□□ □□ ☆☆大学◇◇分野

【目的】上顎犬歯の埋伏や異所萌出で、矯正治療による移動が困難である例に遭遇することがある。このような犬歯を矯正治療により無理に牽引・移動すると、支持組織の退縮、治療期間の延長、不十分な歯根のコントロール、歯根吸収などのリスクが増大することも考えられる。他の治療選択肢としては、当該犬歯を利用して自家歯牙移植を行うか、犬歯を利用せずに同部をインプラントあるいはブリッジなどによって補綴的に回復する、もしくは側切歯と第1小臼歯を隣接させて配列する方法が考えられる。今回は、このような症例に自家歯牙移植を適用したので、矯正治療の経過と共にその短期術後経過について報告する。

【症例】上顎大臼歯歯根尖部に水平埋伏している上顎左側犬歯を主訴とする15歳9か月の女子、小臼歯間頰側に異所萌出している上顎右側犬歯と正中離開を主訴とする15歳8か月の女子に対し、矯正治療による歯列戻りの犬歯牽引は困難と判断した。2症例ともに、まず、他の不正咬合の矯正治療とともに移植床となる犬歯部の幅径確保を行った。次に、晩期残存乳犬歯および当該犬歯を抜歯し、乳犬歯抜歯窩に移植床を形成したのち、犬歯を植立し、歯冠部をワイヤー固定した。移植数週間後根管処置を行い、さらに数か月の固定後、最終咬合形成を行った。総治療期間は、それぞれ27か月（移植前13か月、固定3か月、移植後11か月）、14.5か月（移植前5か月、固定2.5か月、移植後7か月）であった。

【結果および考察】移植後焼く2年経過時において、移植した犬歯に異常な動揺や吸収像は認められなかった。本症例のように移植歯が単根で歯根膜が十分得られ、移植床の骨の幅と高さが十分で、年齢の低い症例であったことが、良好な結果をもたらしたと考えられる。今後、長期術後経過の観察を通して、このような症例に対し、移植が治療の選択肢となるかについて、より詳細に検討する必要がある。

(会員外の演者：△△ △△、□□ □□)

第33回東北矯正歯科学会大会

症例展示 抄録作成例

演題募集要項 抄録の作成方法をよくお読みください。

演 題 名	叢生を伴う上顎前突症例
演 者 名	○○ ○○、△△ △△、□□ □□ ☆☆☆
<p>【症例】13歳2か月男子</p> <p>【初診】1998年11月</p> <p>【主訴】上顎前歯の前突感</p> <p>【所見】正貌では顔面非対称は認められず、側貌はconvexタイプを呈し、上唇の突出および口唇閉鎖不全が認められた。骨格系では、下顎がやや後退した骨格性I級（ANB6°）を呈していた。また、歯系ではHellmanの dental ageがIVAで、上下顎歯列正中線は顔面正中線に一致し、臼歯および犬歯関係ともにI級で、上顎切歯が著しく唇側傾斜していた。また、歯冠幅径の総和が大きく、arch length discrepancyは上顎で-3.0mm、下顎で-6.0mmであった。</p> <p>【診断】下顎歯列に叢生を伴い、上顎切歯が著しく唇側傾斜、下顎がやや後退した上顎前突症で、思春期最大成長期の男子症例。</p> <p>【治療方針】口腔衛生指導を施した後、上顎第一小白歯と下顎第二小白歯を抜去し、マルチブラケット装置によって臼歯および犬歯関係を改善するとともに、上顎切歯を舌側傾斜移動させ、機能的咬合の確立を図る。</p> <p>【治療経過】まず下顎にマルチブラケット装置を装着してレベリングした後、顎内ゴムを用いて抜歯空隙を閉鎖した。その後、上顎にもマルチブラケット装置を装着し、Contraction loopとII級ゴムを用いて犬歯の遠心移動、切歯の舌側移動を図り、臼歯および犬歯関係がI級関係になるように調整した。最終的には、上下顎とも.018”x.025”のideal archを用いて細部調整を行い、動的治療を終了した。その後、直ちに床保定装置による保定を開始した。動的治療期間は1年10か月であった。現在17歳3か月で、保定開始後2年4か月を経過したが、後戻りは観察されず、安定した咬合状態を維持している。</p> <p>【考察】骨格性I級の症例に対し、顎外固定装置を用いず、上下顎小白歯の抜去と歯槽性の補償的改善によってI級の咬合関係を獲得することができた。また、上顎切歯も十分に後退されることができ、主訴である上顎前突感も解消し、口唇閉鎖も容易になった。</p> <p>(会員外の演者：△△ △△、□□ □□)</p>	

第33回東北矯正歯科学会大会

症例報告 抄録作成例

演題募集要項 抄録の作成方法をよくお読みください。